



発刊100号記念

機関紙に見る協会の歩み

(特集4~8ページ)

皆様の力に支えられて、

この日を迎えることができました

平和、教育、環境、人づくりなど
「ユネスコの心」を育む活動の輪を広げよう

広島ユネスコ協会の年明けの恒例行事「新春フェスタ2018」(広島市助成事業、後援・広島市教育委員会、協力・一般財団法人多山報恩会)が、今年も1月27日(土)、広島市文化交流会館で、にぎやかに、そして厳かに開かれました。プログラムは、「第20回広島ユネスコ活動奨励賞授賞式」「新春コンサート」の後、「受賞祝賀・交流会」の順に進められました。

<第20回広島ユネスコ活動奨励賞授賞式>では、平和・教育・環境・福祉交流などを通じて、「ユネスコの平和の心」を広げている、学校(4校)と社会部門(6団体)の表彰が行われました(学校・団体名と、その活動内容は2ページに)。

<コンサート>は、50年以上の歴史を持つ、広島県庁合唱団(団長・上平 毅さん)の出演をいただき、指揮・栗栖 亮さん、ピアノ・坂井桂子さんのリードで、第一部「美しい日本」をテーマに、「ふるさと」などの唱歌11曲、「恋をテーマ」に「めぐる季節」など、アンコール曲を含めて8曲をさわやかに、柔らかな歌声を披露していただきました。

<受賞祝賀・交流会>では、各受賞者から「一言アピール」が行われるとともに、受賞者、来賓、協会員との和やかな交流会がもたれ、今後の活発な活動展開を約束しました。



広島県庁合唱団の新春コンサート

新春恒例のフェスタ
2018
 第20回「活動奨励賞」の表彰や、
 コンサート(合唱披露)、祝賀・交流会にぎやかに



亀井章協会長

広島ユネスコ
活動奨励賞

受賞校と団体、活動の骨子

<学校部門>

○広島市立荒神町小学校 (校長 友田 圭一)

ネパールを中心として、児童の手紙や作品等を現地の学校と交流したり、校区内の留学生会館と連携し合ったりすることにより、国際交流や多文化理解を推進。

○広島市立中野東小学校 (校長 坊田 裕紀子)

「緑のカーテンは地球を救うか?」という環境問題を学校全体で設定し、学年に応じた環境緑化の活動を全教科・領域を通じて実施。

○広島市立戸山小・中学校 (校長 久都内 文治)

郷土の伝統芸能である「戸山田楽ばやし」を継承・保存していくとともに、地域の歴史や自然環境を理解しながら、防災活動を実施。

○広島市立沼田高等学校 (校長 野依 英二)

町内の小・中学校、大学と積極的に連携を図り、交流を図る場(「十六の会」等)を設けて、文化やスポーツ等をリードする活動を行い、地域の町づくりに貢献。

<社会部門>

○ NGO Art Angel International

(代表 Nory Qareeb)

「平和・環境・芸術」をキーワードに、タイやミャンマーの児童施設への支援活動を行うとともに、自立・自活への技術活動を援助。

○ダイヤモンド (代表 金輪 忠雄)

ヒロシマ・広島福祉施設に赴き、ダンベル体操・歌・フラダンス等を披露する中で、利用者の平和希求かつ健康寿命を延ばす活動を実施。

○黄金山さくらの会 (会長 下村 邦三)

黄金山(南区)を再度、桜の名所にするため、桜の再生や様々な種類の桜が咲く「桜の博物館」を目指し、植樹や剪定・下草刈り等を継続。

○高校生平和大使派遣委員会 (中国地区共同代表 小早川 健)

「ピリョクだけどもリョクじゃない」を合い言葉に、平和を願う「ヒロシマの心」を伝え、核兵器廃絶と平和な世界の実現を目指す活動を展開。

○本川おもてなし隊 (代表 田中 八重子)

海外からの来訪者に対して、茶道・書道等の日本文化の紹介や体験の機会を設けるとともに、本川小学校と連携した平和学習等を実施。

○湯来ふるさとプロジェクト (代表 佐々木 大五朗)

禿げ山であった地元の狐原山(佐伯区)を、「桜の森」にするため、植樹や下草刈り・不用木の伐採・散策道の整備等を行い、人々が憩える場に尽力。

「受賞20年」を冊子に

教育部会は1月27日、「広島ユネスコ活動奨励賞受賞校・団体の活動一覧 ~20年の流れ~」について、冊子を発行しました。



活動奨励賞を受賞された学校・団体の皆さん



祝賀・交流会



藤井正一
当協会副会長

2017年度

高校生国際理解セミナー

高校生国際理解セミナー（広島ユネスコ協会と広島市青少年センターが主催）が、12月23日（土・祝日）、同センターで行われました。

＜講演＞午前の講演では、「スコットランドから見た日本～国際交流員として感じる」と題して、広島市国際交流員・アンドリュー・デンプスターさんが話されました（写真①）。続いて、「第20代高校生平和大使」小林美晴さん（広島大学附属高校2年＝写真②）、高水学園・高水高校の鶴川梨音さん、大崎ひな子さん、赤川龍君が体験報告（写真③）。



この後の意見交換では、広島大学附属中・高校の藤原隆範教諭のリードで、「私が今年1年で、1番に思い出に残った事」について、トークン・まとめを行いました。

＜コーアクション＞食事の後、コーアクション（世界寺子屋運動街頭募金）を、中区八丁堀で実施（写真④）。皆様からの寄金43,692円は、12月25日（月）、郵便局を通じて、日本ユネスコ協会連盟あてに送らせていただきました。有難うございました。



ユネスコサロン 講師・森 重昭さん

3月3日（土）、

歴史研究家・森 重昭さんを講師にお迎えして「第173回ユネスコサロン」が、アステールプラザ大会議室で開かれました。

森さんは8歳の時、西区己斐で被爆されました。戦後、会社勤めの傍ら、原爆投下後の広島を調べ続け「戦争のむごさに敵も味方もない」の精神のもと被爆死していた12人の米兵を捜し出し、自費で慰霊碑を建立されました。その地道な業績が認められ、平成28年5月広島を訪問されましたオバマ大統領（当時）とご対面されました。

講演会では広島から戦後の発展、原爆医療そして42年間にわたる被爆死した米兵の追跡など、幅広いお話をされました。

（文化部会長 高田幸子）

杉並ユ協の広島学習

3月25日、杉並ユネスコ協会青年部が広島に、

3泊4日の日程で、20回目の平和学習の研修旅行に來られました。広ユ協のメンバーが出迎えるとともに、初日は畑口 實・元平和記念資料館長（広ユ協副会長）の講話を聞き、意見交換会では、ドイツ生徒が「ドイツの戦後教育」を話されました。リピーターの参加者は、原爆の悲惨さや平和の大切さを学んだ体験等を話し合いました。地元広島からは、広島大学附属高等学校の生徒が参加し交流しました。（平和・世界遺産部会長 内田一士）

書き損じはがきを切手に交換

広ユ協は、日本ユネスコ協会連盟

の「2018年度書き損じはがき・キャンペーン」の運動に呼応して、はがきを切手に交換して、連盟に送付させていただきました。

送付した切手の総額は13,663円です。皆様の善意に感謝しつつ、引き続きよろしくお申し上げます。※日本ユネスコ協会連盟のキャンペーンの期間は、毎年度9月から翌年の8月までとなっています。

（事務局長 森木 学）

＜会員募集＞

ユネスコの精神に賛同し、協会の活動に参加したり、支援をしていただける方を募集しています。年会費（個人会員の場合）3,000円、青年（～35歳以下）は2,000円。申込先：森木事務局長090-7132-2284又は、広島ユネスコ協会HPから検索。当協会URL：http://www.unesco.jp/hiroshima/入会案内へ。

＜新会員紹介＞（2017年12月～2018年2月 敬称略）

木船 裕美 堀 規夫

日誌

＜'17年12月＞

2日／理事会
2日／高校生国際理解セミナー打ち合わせ会議（青少年育成部会）
12日／機関紙100号打ち合わせ

せ（広報部会）
23日／高校生国際理解セミナー2017（教育部会・青少年育成部会）
23日／コーアクション【世界寺子屋運動街頭募金活動】（青少年育成部会）

＜'18年1月＞

11日／新春フェスタ打ち合わせ

せ（文化部会）
27日／新春フェスタ・第20回広島ユネスコ活動奨励賞授賞式、コンサート
27日／課題協議（組織部会）
27日／杉並ユネスコ協会青年部の広島スタディツアーにおける平和学習会打ち合わせ（平和部会）

＜2月＞

2日／第173回ユネスコサロンの準備会議（文化部会）
7日／機関紙100号打ち合わせ（広報部会）
17日／事業報告・事業計画等審議（国際部会）
28日／今年度の反省、次年度の計画協議（教育部会）

～「ヒロシマ・ユネスコ」100号記念～

機関紙に見る協会の歩み

1973年6月、広島ユネスコクラブとしてスタートし、翌年、日本ユネスコ協会連盟に加盟するとともに、広島ユネスコ協会と名称変更した当協会は、その翌年度には、機関紙「ヒロシマ・ユネスコ」を創刊しました。以来40数年、今号で節目の100号を迎えることになりました。半世紀に近い間、当協会の主張、出来事、様々な行事を、会員をはじめ支えてくださる多くの皆さんに報告し、叱咤・激励していただきながら、ご理解を深めていただく広報活動の一環として、今日まで歩んできました。

本紙を通して、広島ユネスコ協会の歩みを振り返り、今後の活動に資したいと思えます。

なお、紙面の都合上全ての活動を取り上げることができませんので、10号ごとに区切って大まかな動きだけを取り上げることにいたします。

1975年（昭和50年）11月に創刊

1号～10号（1975年～1981年）

・1975年、協会発足3年目に創刊した本紙初号には、その記念として、広島市長荒木武氏にお祝いの挨拶を寄稿していただいています。「戦争の惨禍を身をもって体験した広島市において、ユネスコの理念を具現化しようとするユネスコ協会に期待する」との趣旨の挨拶は、当時の会員に大きな励みとなりました。以後、協会の創立に尽力いただいた広島大学名誉教授内海巖氏（日本ユネスコ協会連盟副会長、当協会顧問）、初代当協会会長の永井慈郎氏、日本ユネスコ協会連盟事務局長竹本忠雄氏など多くの方々が、民間ユネスコ活動を進める協会のあるべき姿、充実策などについて論考を寄せられ、会員の意識啓発をしています。

・また、協会としてもこれを受けて会員の学習の場として、広島市平和記念館などで「ユネスコの集い」を毎月のように開催しています。

・さらに、これからのユネスコ活動に青年層の果たす役割が大きいことを認識し、ユネスコ青年セミナーを協会発足2年目にはスタートさせ、府中青少年文化センターなどで、宿泊研修を含めて5年連続で開催しました。このセミナーからユネスコ青年部が誕生（代表＝松岡盛人・現当協会副会長）、数年にわたって「原爆講座」などの事業を開催し、各方面から反響を呼んだほか、全国各地のユネスコ

コ青年部と交流し、多くの成果を挙げました。

・さらに、協会5周年記念事業として1978年には、世界の中の日本を考えようと「高校生のつどい」をスタートさせました。現在では高校生国際理解講座として、引き続き毎年実施していますが、これは他協会からも高い評価を受けているところです。

11号～20号（1981年～1987年）

・発足後協会の基礎がある程度確立して、対外的にユネスコ協会の存在を広く周知しようとする動きが見えています。その中でも特筆すべきは、1984年7月に「第1回民間ユネスコ運動世界大会」の広島大会を受け入れ、開催したことです。世界ユネスコ協会クラブ連盟が設立されて最初の世界大会を、世界における民間ユネスコ運動発祥国の日本で開催することになり、開催地にその発祥の地仙台とともに神戸、広島に白羽の矢が立ったものです。世界82か国・地域から民間ユネスコ運動の指導者が集い、広島グランドホテルで、「人権と平和」について熱い議論が繰り広げられました。朝日生命広島支店の絶大な協力、行政・民間企業の支援、県・市の400万円の助成金をいただき、成功裏に完遂することができました。高橋昭博常任理事の被爆体験に基づいた平和への提言、河村盛明会長の平和アピールなどが、多くの感動を与え、また、広島市長主催の歓迎レセプションでは、各国指導者たちの和やかな交流も行われるなど意義ある大会となりました。（この大会は、日本ユネスコ運動全国大会を兼ねていました）。会員はこの大会の準備と運営に多大のエネルギーを費やし、協会は数年間燃え尽き症候群の体を示したことも今は語り草となっています。

・1986年3月、NHK特別主幹磯村尚徳氏を講師に、文化講演会を西区民文化センターで開催し、満席の聴衆にユネスコの理念を理解していただくことができました。この種の文化講演会事業は、以後、国広正雄氏、柳田邦男氏、山口崇氏、加藤剛氏、新藤兼人氏、乙羽信子氏などの著名人を招聘し適時開催し、多くの市民に参加していただいております。

21号～30号 (1988年～1992年)

・文化事業の一環としてのユネスコサロンを開始したのがこの時期でした。第1回目は1988年1月、後に人間国宝になられた備前焼作家の藤原雄氏を講師に、広島アンデルセンで開催しました。以後、このユネスコサロンは年4～5回のペースで開催しており、現在、173回という長寿事業であることはご存知の通りです。ちなみに、明治大学教授越智道雄氏、前東京大学教授舩添要一氏（後に東京都知事）、尺八琴古流家元川瀬順輔氏なども、初期の講師としておいでいただいています。当協会の文化活動の基礎が築かれた時代とも言えるのではないかと考えます。

・当協会の国際交流事業が本格的に動き出したのがこの時期です。1988年、日本ユネスコ協会連盟の日中ユネスコ交流プロジェクトとして、岐阜ユネスコ協会とともに、北京市ユネスコクラブと友好姉妹協会縁組協定に現地で調印し（加藤朗一副会長、信井正行事務局長、新川貞夫常任理事を派遣）、4年間の相互訪問を通じた交流が始まりました。2期目の姉妹縁組を郡山ユネスコ協会とともに締結し、さらに4年間、都合8年間の日中交流で、北京から4回にわたって、30名の訪問団を受け入れ、当協会から15名の会員を派遣、相互理解を深めたところでした。この間、教科書の交換などを通じた文化交流も行なっていますが、この後、2000年からの韓国ユネスコ大邱協会との、5期にわたる姉妹交流につながります。

・また、1990年には高校生の海外研修を開始し、第1回はアメリカへ引率を含めて9名の研修団を派遣しています。以後東南アジア、オーストラリア、中国へ派遣し、大きな成果を挙げました。この事業は、当時青少年の育成に実績を挙げられていた（財）多山報恩会様の、絶大なる資金援助と人的尽力により実現できたものです。多山報恩会様には、その後現在まで多額の助成金を賜り、協会運営の大きな力となっただいただいているところで、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

31号～40号 (1992年～1997年)

・この時期、原爆ドームのユネスコ世界遺産登録へ向けて、他の市民団体と共に署名活動、政府へ請願行動、学習会、講演会などの様々な活動に参加し、大きな期待を寄せていましたが、ついに1996年12月に宮島とともに念願の世界遺産に登録され、今後さらに世界へ向かって恒久平和を訴え

ていく決意を固めたのでした。この運動の統合団体「すすめる会」古田隆規初代代表（元広島弁護士会会長）には、二度にわたってその意味するところ、登録への経緯などについて本紙へ巻頭言を寄せていただきました。

・また、1994年に広島市でアジア競技大会が開催されるという大きな出来事がありました。当協会も、このアジア競技大会の成功を市民と共に願った一人です。当時市内公民館では、市民を巻き込んで42の参加国・地域を手分けして応援しようとする1館1国応援運動を展開しましたが、当協会もその事業への協力を様々な形で行い、機運を盛り上げたところでした。

さらに、当時文部省は国際理解のための研究事業を募集しておりましたので、広島ユネスコ協会は、平成5年度事業に1館1国運動との接点を求めることを視野にこれに応募、委嘱されました。アジア競技大会の開催前後にこの大会がもたらす影響を中心に、どのような市民意識の変化が見られるのか、公民館の協力を仰いで調査研究をしました。当時、広島市立図書館管理課長・沖本博理事が中心になって調査と分析を行い、その結果は本紙に2回にわたって報告しました。こうした本格的な研究は当協会初の試みでした。

41号～50号 (1997年～2000年)

・原爆ドームがユネスコ世界遺産リストに登録され、広島ユネスコ協会では啓発とユネスコへの認識の深まりを期して、いくつかの記念事業を実施しました。既に前期間には、オリジナルのドーム絵はがきセット（四国五郎氏のドーム前の母子像の絵をカバーに、写真と絵で構成した5枚セット）の発行・頒布事業を実施、1997年12月には西区民文化センターで、俳優の加藤剛氏を招聘して「原爆ドーム世界遺産登録記念・講演と朗読劇の集い」（講演会講師は平岡敬広島市長）を実施しました。定数をはるかに上回る応募もあり、会場は立錐の余地もないほど満員でした。加藤剛氏の「コルチャック先生・その愛と死」と題する朗読劇は、聴衆に大変感銘を与えるものでした。また、平岡市長の「原爆ドーム発世界へのメッセージ」では、改めて原爆ドームのもつ意義を認識させられました。この講演録全文は直後に本紙特集号として発行しました。

なお世界遺産記念事業は、この後、10周年記念写真展を市民文化交流センター、市内公民館を巡回して開催しました。また、20周年では記念の集

いを原爆資料館にて開催し、再び平岡敬元広島市長に「記憶と継承～原爆ドームをめぐる」と題する講演をしていただいたほか、基金として蓄積しているドーム絵はがきの売上金の一部20万円を、広島市の原爆ドーム保存基金に寄付しています。

この世界遺産登録を契機に、1999年には「知っておきたいヒロシマ講座」で原爆ドーム、広島市の戦前・戦後史、慰霊碑、世界の核の現状などを7回にわたって開催し市民に、学ぶ機会を設定し、毎回50人の参加者を得ました。

・1998年には協会結成25周年を記念して、「広島ユネスコ活動奨励賞」を創設、平和、国際理解・交流・協力の分野で学校、社会部門における顕著な活動を継続し、功績を挙げている学校、団体の顕彰事業を開始し、以後、現在まで継続して実施しております。現在は、当初の分野に加えて地域文化遺産継承、環境問題などを追加し、持続的な社会の建設への動きを一層促そうとしております。先般、20回目を終了し、トータル約180団体を顕彰するなど大きな実績を挙げています。

なお、この事業の表彰式を、翌年の新春に著名な音楽家などの演奏会と併せて新春フェスタとして実施し、新春を飾る年中事業となっています。

・25周年記念事業としては、このほかユネスコサロン現地講座として、各地を訪問して現地で文化遺産を学ぶ事業を実施しました。第1回目は宮島を訪れましたが、以後7年、下蒲刈島、吉和村、島根石見銀山、鞆の浦とホロコースト記念館、岡山閑谷学校、北広島などを訪れ、毎回多くの参加者を得るなど、意義ある学習の場となりました。

51号～60号 (2001年～2004年)

・国際連合が2000年を「平和の文化年」とすることを受けて、ユネスコ本部が、世界の人々1億人の署名を集めて、ノーベル賞受賞者たちの叡智が結集された「わたしの平和宣言」を制定する運動を進めていることから、日本ユネスコ協会連盟はこれに呼応して、全国の各地協会に署名集めの呼びかけを行いました。当協会はこれを受けて、会員一人一人ができるだけのことをしようと立ち上がりました。会員が知人、友人に呼びかけて署名集めをすると同時に、同年5月に広島そごうデパートの前で、会員が街頭署名活動を展開し、多数の市民に協力いただきました。その結果、目標の1万人の署名を集めることができ、協会連盟に

届けることができました。この「わたしの平和宣言」は次の6項目です。

①すべてのひとの生命を大切にします ②どんな暴力も許しません ③思いやりの心を持ち、助け合います ④相手の立場に立って考えます ⑤かけがえのない地球環境を守ります ⑥みんなで力を合わせます

・この2000年の国連「平和の文化年」では、ユネスコ協会連盟は全国の協会に、平和を願って平和の鐘を鳴らす運動を呼びかけました。当協会は、これに呼応して終戦記念の8月15日、平和記念公園の平和の鐘の前で、市民を巻き込んで平和の鐘を打鐘しながら戦没者、原爆犠牲者の慰霊をし、戦争のない平和な社会を築くことを誓い合う「平和の鐘事業」を開催しました。約100名の参加者が黙祷と打鐘をし、多くのマスコミの取材を得て、意義ある1日を過ごしました。この事業は現在も継続していますが、最近では、先程の「わたしの平和宣言」、ユネスコ憲章前文を参加者みんなで朗読しています。(2008年度は、原爆の子の像建立50周年を記念して同像前広場にて実施)

・2003年は、広島ユネスコ協会設立30周年の節目の年に当たり、いくつかの記念事業を展開しました。同年9月、映画監督の新藤兼人氏を講師に、記念講演会を県民文化センターで実施しました。新藤先生は「生きているかぎり生き抜きたい」を演題に、90歳をはるかに超えているとは思えない迫力で、同日に上映した同監督作品「午後の遺言状」について、夫人の乙羽信子さんとの映画づくりを通したお話をされ、感銘を受けました。当日は550人の定員に877人の応募があり、市民に対してユネスコ協会の存在、活動を強く訴えることができました。

また、当日行なった記念パーティは秋葉忠利広島市長、新藤監督、教育・文化関係者など多数の来賓を得て盛大な会となりました。参加者には、250ページに及ぶ30周年記念誌を作成し贈呈、感謝の念を伝えました。

・なお、2003年には木村進匡当協会副会長のご厚意で、先生経営の木村神経・内科クリニックの1室を当協会事務局室として無償でご提供くださり、5年間気兼ねなく会議も含めて自由に使うことができ、本当に助かりました。後にも先にも専用の事務室をもったのはこの期間だけで、充実した協会の運営ができたものと感謝した次第です。

61号～70号 (2004年～2008年)

・2005年は被爆60周年という節目の年、当協会はこの年に当たり意義ある企画を模索していた中、協会連盟から当協会に、第51回全国高校ユネスコ研究大会の主管をという打診があり、「高校生の集い」などで下地を培ってきたこともあって、ヒロシマの地にふさわしい大会にとの意気込みをもって対応することになりました。高校生の大会とはいえ、全国から多くの高校生が集まる大きな大会であり、協会連盟はもちろんのこと全国高校ユネスコ活動指導者協議会などとの入念な協議を踏まえ、山本隆信事務局長、藤原隆範理事を中心に、会員の総力を挙げて綿密な準備をしました。大会は8月3日から原爆記念日の6日まで広島市、江田島（国立江田島青年の家）を中心に外国人高校生を含めて312名が集い、「いまこそ広島から～心の中に平和の砦を！」をテーマに、当協会高橋昭博副会長の自らの壮絶な体験と若い世代へのメッセージなどの講演を聞き、熱い討議と交流を重ね、最後に広島アピールを読み上げて終了しました。1984年の民間ユネスコ運動世界大会以来のビッグ・イベントのため、困難もありましたが、協会連盟から「今大会ほど地元ユネスコ協会が支えたことはない」とのコメントもあるなど、会員の総力を挙げた準備と当日の運営は高い評価を受け、今後の高校生大会のひとつのモデルとなるものでした。

・ユネスコ・サロンは、1988年以来休むことなく続けてきましたが、これまでの市内中心部だけでの開催では、周辺の市民の参加が期待しにくいこともあり、年1回程度は地域に出向いて開催してはとの提言を踏まえて、2006年3月に初めて、ユネスコ出前講座を古田公民館で実施しました。公民館の絶大な協力のもと、「アンデスの響き～フォルクローレ」と題する、南米音楽の生演奏と体験談の楽しいトークに、ホール満杯の市民は大変喜んでいました。これ以降、市内各公民館でこの種の事業を継続し、好評を得ています。

・原爆ドーム世界遺産登録10周年を迎えた2006年、今度は一転、危機遺産となることを心配するような出来事が生じました。ドーム近くにドームをはるかに超える高さの高層マンションの建設が明るみになったのです。多くの市民団体がドームの遺産価値を守るために、景観保全運動を展開しました。この動きに対して、イコモス日本国内委員会などから危機遺産への言及もありました。当協会はこの動きの中で、独自に広島市に対して、

「原爆ドームの景観保護に関する要請書」を提出し、美観形成要綱をさらに厳しくして条例施行への移行などを内容とした景観保全を訴えました。加えて、同時期に旧広島市民球場跡地の活用の問題も出るなどしました。この時期、このように原爆ドームが危機遺産になることを憂慮して、ドーム周辺の景観保全の動きに関心をもって見守ることを、本紙では度々記事として取り上げました。

なお関連して、世界遺産20周年を間近にした2014年には、カキ船の元安橋近くへの移転の問題も起こり、当協会も議論しながら国、県、市に対して景観保全の適切な対応求めて申し入れなども行なってきました。

・2006年4月には、これまでの33年間の教育・文化の振興の功績を認められて、広島市から市政功労者表彰の栄に浴し、当協会の歩みに新たな1ページを記しました。

71号～80号 (2009年～2012年)

・この頃から日本ユネスコ協会連盟などでは、ESD（持続可能な開発のための教育）への対応についての動きが見られました。中国地方では、2009年11月に岡山市で開催された中国ブロックユネスコ研究大会で、初めてメインテーマとして取り上げられたのが起点となりました。同大会では伊東亮三中国ブロック・ユネスコ連絡協議会会長（前広島ユネスコ協会会長）の開会挨拶の中でその必要性が訴えられ、続いて文部科学省国際統括官付係長の「ESDとは何か」のテーマで解説、学校、社会教育からの実践事例の発表、ESDとユネスコスクールの推進についてのパネルディスカッションなど、持続可能な社会の担い手を育むために、ユネスコ活動はどう対応すべきか協議されたのでした。

こうした動きに端を発して地域ユ協でもESD、ユネスコスクールへの取り組みが少しずつ始められたと考えています。当協会でも、本誌2010年10月からの中山修一ユネスコ国内委員（広島ユネスコ協会副会長）の3回シリーズ「ESDってなに？」解説で会員の啓発から動きを開始しました。もちろん、ユネスコ活動奨励賞事業には、既にこうした活動の魁ではありましたが、当協会として正式なESD、ユネスコスクールへの関わりは、この時始まったと言って過言ではないと思います。その後は、当協会は、各種研修会研究集会への参加、内部研修のための教材の作成、研修会の実施、ユネスコスクール認定校への協会連盟からのプレート

伝達、ESDの視点に立った事業を展開しています。

・2012年3月11日午後2時46分、当協会は日本ユネスコ協会連盟の呼びかけに応じて、平和記念公園平和の鐘前で、東日本大震災1周年を記念して「3.11の鐘」を開催しました。大震災犠牲者の追悼と復興、被災した子どもたちへの励ましの思いを込めて市民、本川小学校児童たちとともに平和の鐘を打鐘し、子ども支援のためのカンパと寄せ書きを集めて協会連盟に託しました。

81号～90号 (2012年～2015年)

・広島ユネスコ協会は2013年で40周年を迎え、各種の記念行事を行ないました。その1つは、記念誌「2003～2013 10年の歩み」(200ページ)の発行で、広島市長、日本ユネスコ連盟会長、広島県ユネスコ連絡協議会会長、宮島ユネスコ協会会長、杉並ユネスコ協会会長、韓国ユネスコ大邱協会会長の激励寄稿、年表、各部会からの報告、主要事業の経過、機関紙該当号の収録など記念誌にふさわしい内容としました。

また、記念講演会は、2013年10月、広島平和文化センター理事長・小溝泰義氏を招聘し、「平和文化創造に向けたヒロシマのメッセージ」と題して”平和構築へ、市民運動によって、同じ人間家族としての共同体意識をアジアに世界に広げよう”との貴重な提言をいただき、アステールプラザの200名の市民は感銘を受けたようでした。

さらには、40周年を記念して2014年2月、市民文化交流会館で、中国ブロック・ユネスコ活動研究会を主管しました。ユネスコ活動奨励賞やESDを中心に、当協会独自色を打ち出し、「ESDの推進がユネスコ運動の未来を拓く」をメインテーマにしたこの研究会は、前夜からの10数年ぶりの大雪にも関わらず、中国地方各地から116名の参加者を得て盛大に行われました。奨励賞の表彰式も本研究会のプログラムの1つにしたこともあり、活動実践者との交流ももたれるなど意義ある大会となりました。

・これまでの「ヒロシマ・ユネスコ」はB5判縦書きでしたが、第89号から時代に即した読みやすい紙面づくりを目指して、A4判横書きの形式に改めました。

インターネットの当協会ホームページも写真を駆使して親しみやすいものとなりましたので、協会広報活動は一段と充実したものになったと考えています。

91号～99号 (2015年～2017年)

・2015年は被爆70周年という節目の年、行政、民間ともこれを記念して平和国家、平和共存の世界を堅持し、明るい未来をきずくための記念行事を展開しましたが、当協会も本紙91号を「被爆・終戦70年 平和へ、私が伝えたいこと、遺したいこと」特別号(16ページ)として発行しました。15名の方に戦争体験、被爆体験などを通して、戦争犠牲者や被爆者を二度と出してはならないという、世界平和への叫びが滲んだ玉稿を寄せていただき、また、前年に未曾有の8.20広島豪雨災害体験者に復興・再建に向け、手を携えて生きようとする思いを、特別寄稿の形で協力いただきました。

・2016年12月が原爆ドーム世界遺産登録20周年であり、当協会はこれを記念して、「世界遺産登録20周年記念の集い」を平和記念資料館東館地下ホールで開催しました。記念講演に平岡敬前広島市長を講師として招聘、「記憶と継承～原爆ドームをめぐる」のテーマで、前回の講演(1996年)に続いて世界遺産・原爆ドームにまつわる貴重なお話をいただき、改めて「核兵器廃絶へ連帯の輪拡大」を認識させられました。

集いではこのほか、かつてユネスコ活動奨励賞も受賞した広島ジュニアコーラス、フェミニンコールの「平和の歌」合唱があり、また、原爆ドーム絵はがき売上金の一部20万円を、広島市ドーム保存基金に寄付するセレモニーを行うなど、20周年にふさわしい会となりました。直後に本紙96号を特集号として、全文を掲載して発行しました。

× × ×

当機関紙は毎号、平和の鐘を鳴らそう事業(2000年開始)、ユネスコ活動奨励賞事業と新春フェスタ(1998年開始)、ユネスコサロン(1988年開始)、韓国ユネスコ大邱協会との姉妹交流(2000年開始)、高校生国際理解講座とコアクション(1978年開始)、杉並ユネスコ協会青年部広島研修受け入れ(1999年開始)、国際交流活動あせろべ参加(1988年開始)などのほか、国際交流・協力の日参加事業、青少年英会話講座、大邱の日参加事業などの多くの事業をお知らせ、報告の形でその都度掲載し、会員、市民の皆さんの理解を深める努力をしています。

これまで発行した99号までは、すべて当協会ホームページに網羅しておりますのでご覧ください。

(<http://www.unesco.jp/hiroshima/>)

(広報部会担当 副会長・古田碩永)